

薄墨色のベルトコンベアーの上に四角い封筒が等間隔に並べられて流れてくる。そのベルトコンベアーもまた等間隔に配置され、それぞれのラインに青色の服を着た作業員がこれまた等間隔に立っている。彼らの仕事は流れてくる封筒のフラップを内側に折りこむことだ。

まず目の間に運ばれてきた封筒を取り上げる。そして口を折ってまたベルトコンベアーに戻す。その繰り返り返しである。何も難しいことはない。それだけの作業だ。

ビービービービー

静かな工場の中にブザー音が鳴り響く。無機質な音。一人だけ水色の作業を着た男は面倒くさそうな顔をしてエラーが発生したラインを確認する。

水面

F・7

「またか」

画面に表示された記号を見て吐き捨てるようにそう言う。と、エラーが検出されたラインへと向かう。その間にも他のラインは規則正しく封筒を運び、作業員は封筒を折り、折られた封筒は仕切りの向こうへ吸い込まれていく。停止したベルトコンベアーの傍で痩せた男がぼんやりと立ち尽くしている。情緒のない青色のつなぎは四把だらけで、液体を扱わない作業をしていてどうやってつけたのか分からないような染みが点々と付いている。ズボンの裾は長すぎるのを折っているが、それが戻ってきて靴を隠している。

「今度はなんだ」

水色の服の工場長らしき人物が彼のラインの出口の方へ

歩いてくる。仕切りの手前で止まっている白い封筒を取り上げると、それはフラップが折られていなかった。その封筒を見ると再び工場長は大きな溜息をついた。

「なぜこんなことが起きる？」

「……」

男は答えられない。答えがないわけではなく、答えたところで意味がないからだ。男はこの封筒が誰のどんな手紙を包むのに使われるかを想像していた。

その封筒に入るのは、遠くの家族に宛てた手紙か、しばらく会っていない旧友に出す手紙か、離れて暮らす恋人たちがやりとりする手紙か。バスデーカードを入れるかもしれないし、手紙ではなくちよっとした小物、例えば数枚の写真だとか、を入れて渡すのに使うのかもしれない。その封筒は手から手へと直接渡されるのかもしれないし、長い長い航海を経験するのかもしれない。その封筒を受け取った人は、それを宝箱に入れるかもしれないし、涙で濡らすかもしれないし、破り捨ててごみ箱に入れてしまふかもしれない。

そんなことを考えるだけで彼の思考は海を越えた異国にでも隣の人間の頭の中にも飛んでいける。

「おい、聞いているのか」

男はふっと我に返る。彼の仕事は頭の中で旅をすることではなく、ここにじっと立ってひたすらに封筒の口を折ることなのだ。正直に理由を説明したところでどうなるというのだろうか。

「すみません。集中していませんでした」

先週も先々週も同じミスをして、同じ理由を述べる男に工場長はカチンと来たようで、怒鳴りつけてやろうかと

いう顔をしたが、しばらく男を睨みつけて立ち去る。この工場ではブザー音以外で一定の大きさ以上の音が出る。と更に上の管理センターへ通知されるのだ。

工場長がその場を立ち去る後も男は終了時刻まで必死に作業を続けた。集中しようと思えば思うほど思考は他所へ散らばったが、それをかき集めるようにして何とかミスなく作業を終えた。

次の日、彼は早すぎるほど朝早くに目が覚めた。昨日は目覚ましを忘れ忘れて、遅刻しそうだったのに。余裕を持って家を出る。昨日と同じ道、昨日と同じ道を歩いている。男は突然その事実耐えられなくなった。

「違っ」

そう呟くと男は右折するべき角をまっすぐ進んだ。この時間にここを歩いているのはたいてい男と同じ工場の作業員だ。灰色の建物へ向かう人達の中から一人が突然抜け出したが、周りの人間は特に気にする様子もない。彼の足取りは群れからはぐれた羊ほど弱弱しくなかったからだろう。

いつもと違う道を歩く。いつもと違う景色が見える。

男はその事実理由もなく満足した。結局工場に到着するのは出勤時刻ぎりぎりになってしまった。

*

退勤時刻になり一斉にベルトコンベアが停止する。すると、工場の中央に取り付けられたスピーカーが喋りだす。

「F-7の担当者は至急管理事務室に来てください」
同じ音声二度、三度と繰り返される。ついにこれを解

雇されるのではないかと男は不安になりすぐに事務室へと向かう。

しかし、実際ここでは何をしても解雇されることはないのだ。ここで起きるミスは何に対してもどんな影響も与えない。どんな功績をあげても同様である。ここで作製される口の折られた封筒は、折られた口の封筒を開く工場へと送られる。そしてプレス機を使って折り目のない綺麗な封筒にされるのである。その真つ新な封筒がまたこの工場へ運ばれ、作業員たちはフラップを折るという仕組みだ。もちろん二つの工場で働く彼らはそのことを知らない。管理者の男も知らないし、管理センターの人間も知らないだろう。

「君には健康検査に行ってもらおう」

水色の上着が唐突にそう切り出す。

「何、君が何かしたというわけではないからそう緊張することはない。実は他の工場で事故があつてな。この工場では有害な物質が発生していないか確かめるための標本調査のようなものだ。ランダムで君が選ばれただけのことだよ」

そういつて男は黄色の封筒を手渡される。それ以上のことは何も聞かされなかった。男は不審に思ったがここで何を言つても仕方ない。どうせ工場長も何も知らないからだ。「分かりました」と一言言つて封筒を受け取る。工場長は何も言葉を発さないがこちらを見ている。どうすればいいのか男は分からなかった。

「何ずつと立ってるんだ。もう用事は終わったから早く帰りなさい」

そう言われて慌てて事務室を後にする。荷物を入れたロッカーへ行くと、バッグの中に用心深く封筒を入れた。退勤時間の後一人だけ工場に残っていた男は普段と違

うがらんとした帰り道を楽しんでいた。同じ道はずなのにいつもと違って見えるのが面白かったのだ。

すると向かい側から談笑しながら歩く三人の集団がやってくる。一人は犬を連れていて、顔を見合わせて笑っている。男の方は見ていない。

彼はまだ自分が毎日作っている封筒のことを考えていた。その封筒たちを使う人々の声が聞こえる。歓声する声、憤怒の声、すすり泣き。しかしそれは全て彼の声で再現されたものだ。彼は彼一人で劇を演じているのだ。その様子を想像してみてもほしい。色々な音がする。男の頭の中はいつも騒々しい。

うーっ わんっ

犬が突然男に向かって吠えた。そしてそのことに男は気づかない。男の思考は浮遊し、飛行し、旅行しているからだ。男は無心で歩き続ける。

今度は男が突然「うわっ」といつて顔を手で覆った。その声に今度は三人の集団が驚いた。

今まで気にならなかった夕日が突然目に入って、そのビビッドな緑色が彼の目を貫くように照らした。コンクリートの道路は赤紫色に光だし、木々はオレンジ色に染まっている。それらのコントラストが彼の網膜を痛めつける。彼の見る世界はいつも疲れるほど鮮やかである。

*

家に着くと彼はまず上着を脱ぎ、机の前に腰掛けた。読みかけの本と汚れが固まった皿が置いてある。本に手を伸ばすとはつと封筒のことを思い出した。

先ほど渡されたばかりなのに危うく忘れるところだった、と慌てて封筒を開き、中身を見る。検査の日時、それが行われる施設の住所と地図だけが書かれた簡素な文書だ。しかも検査の日付は明日。やけに急な話だと男は思ったが、命令ということなので仕方がない。

「はあ……」

溜息を一つ。集合日時を見るにいつもより早く起床しなければならぬし、終了時刻も分からないのでもしかすると丸一日時間を取られるのかもしれない。そう思うと憂鬱だった。

考え込んでいた男がおもむろに腰を上げる。絵具とパレットを持って、イーゼルに立てかけられたキャンバスの前に座りなおす。彼の唯一の趣味は絵を描くことだった。彼の見たままの世界を。

今日も見えた景色をそのまま描く。オレンジ色の木々が囲う赤紫の道路にグリーンの夕日が落下していく。目が痛くなるような激しい色使い。

彼はまた描いた絵を偽名で賞に応募していた。そしてその絵は軒並み最優秀賞や優秀賞をかつさらっていくのだ。しかし授賞式には表れないし、偽名なので彼が作者だということは誰も知らない。彼だけが知っていることである。男にとつてはそれが唯一の生きがいであった。

「よし」

無心に絵筆を動かし続け、ふと時計を見るともうすでに夜中の三時を回っていた。明日は早く起きなければならぬのに、うっかり夜遅くまで絵を描いてしまった。

慌てて布団に潜り込み、目を閉じる。うるさい声はまだ鳴り響いたままで、眠りにつくには時間がかかる。耳を塞いでも聞こえる声は彼が半ば意識を手放すように眠るまで囁き続けるのである。

*

ジリジリというアラームの音で慌てて男は飛び起きる。まずい、集合時刻に遅れてしまう。バッグを手に取り、今日は必要のない作業着を詰め込む。玄関に手をかけたところで黄色い封筒を忘れたことに気づき、慌てて引き返す。雑に握りしめられた封筒がぐしゃりと音を立てたと同時に、扉はぱたんと閉まった。

相変わらず彼の頭の中では自分と全く同じ声色が鳴り響く。叫びだすときもあれば、囁き続ける時もある。

誰かに話しかけられている時や工場で全体に向けたアナウンスが流れているとき、工場長が何かの説明をしている時などもこの声は鳴っている。そのせいで人の話を聞き逃したり、そもそも世界で鳴っている音に集中できないことがよくある。作業中も男の脳内では声が男を想像の世界に送り、まさに心ここにあらずといった状態だ。

先日一つ封筒を折り忘れて注意された時も、男の頭の中では声が入っていた。その声が大きければ大きいほど、現実世界の出来事はもやがかかったように聞き取れなくなり、見えなくなる。声はいつも男の生活を邪魔する。

それでも何とか検査の場所までたどり着いた。「健康検査センター」。分かりやすい名前だ。真っ白な建物。

正面の自動ドアの前に立つと静かに開いて、男の中に入るように促す。真っ白い清潔な施設の中には長い真っ白なカウンターが奥の方まで続いている。ここからどこに行けばよいのだろうかとうと辺りを見回していると、カウンターの中から薄桃色の制服を着た女性がこちらへ歩いてきた。

「今日は何の御用でしょうか？」

とにこやかに尋ねる。男は慌てて検査を伝え、封筒の中身を見せる。すると既に上がっている口角を更にぐいと持ち上げて「ではこちらにどうぞ」と男をエレベーターへ誘導した。

ボタンを押してしばらく待たされる。男はこの施設に來るのは初めてで、きよろきよろと施設内を観察している。そしてまた男の頭の中で物語が語られ始める。

この健康センターは健康センターという名で不必要な人間を消す施設なのではないだろうか。工場長はランダムで私が選ばれたと言っていたが、先週同じようなミスは何度も繰り返したことがどうも無関係とは思えない。きよろの種類の回数に一定の基準が設けられていて、それを越えてしまった人間を「検査」という名目で「送り」殺してしまうのだ。きよろ考案の全つじつまが合う。封筒を見せた途端他の人間が使っていない奥まった場所にあるエレベーターへ案内されたこと、職員がやけに笑顔で接してくることに、これらもその事実と真実味を持たせているではないか！ やはりこれはどう考えなくても必要な私を消すためのいん……

「うるさいっ」

次第にポリウムを上げる物騒な声に思わず男は声を荒げた。脳内の声はこんな馬鹿げた妄想を繰り返していることもある。SF小説でもあるまいしと思うが、あまりにうるさい声につい反応してしまった。

職員は一瞬びくりとしたが、すぐに平然とした態度に戻る。男はそれを見てどうにもいたたまれない気持ちになった。母親が自分のために買ってくれた万年筆を壊した時や、自分の絵を褒めてくれていた人に似顔絵をプレ

ゼントしたら泣かせてしまった時の気分とよく似ていた。
ピンポン

エレベーターが到着し。実際はわずかな時間だろうが男にとつては永久に感じる瞬間が終わった。こ

「こちらに乗って七階までお進みください」
職員はエレベーターには乗らない。男が言われた通り七階のボタンと「閉」ボタンを押すと、扉は閉じられ、深々とお辞儀をする職員が深々とお辞儀をした状態のまま見えなくなった。

また同じピンポンという音がして七階に到着する。エレベーターを降りた所に立札がある。

「検査の方、右へお進みください」
指示通り右へ行く。しばらくまっすぐ歩くと今度は突き当りの壁に張り紙がしてある。

「ハサミなどの金属製品を持っている方はこちらにお預けください。預けましたら、左にお進みください」
特に持っていないのでそのまま左へ。すると突き当りに一つの白い扉があり、そこにまた張り紙がしてある。

「検査にご協力いただき誠にありがとうございます。検査はこの部屋で行われます。お荷物がある方は下のかごにお預けください」

ようやく検査室に到着か、と薄汚れたブルーの作業着が入ったバッグから封筒を取り出し、部屋のドアを開ける。

「協力ありがとうございます」

そこには白衣を着た女性が一人座っており、傍には先ほど男を誘導した職員と同じ薄桃色の制服を着た男性がいた。

「では早速検査を始めていきたいと思しますので、こちらに移動してください」

男性職員が指差す方へ行くと、検査器具らしきものがずらりと並べられていた。

まず唾液と髪の毛一本を採取される。唾液を試験管に入ったピンク色の液体に慎重に混ぜる。髪の毛は顕微鏡らしき器具でじっくりと観察した後に、黄緑色の液体に浸してしばらく待つ。更にその次、白い液体を飲んだ後に体中をスキャンするような機械に入れられる。その後も男には到底目的が分からない検査をいくつか受け、三十分ほど時間が経ったところで、終了を告げられた。

「はい。では検査結果は後日職場の方に郵送いたしますので、今日はもう帰っていただいて大丈夫ですよ」

「はあ」
さすがに先ほどの作り話のような頭の声を信じていたわけではないが、こんなに早く終わると思っていなかったのだ。男は拍子抜けしてのそのそと検査台から立ち上がる。かかとの潰れた靴をそのまま履き、荷物を取りに検査室を後にしようとする。

「あ、最後に一つだけ」

白衣の女性が何か思い出したように声をあげる。

「これは検査とは全く関係ないのですが、最近職場で悩んでいることとか仕事で困っていることとかはありますか？」
男はきょとんとした顔で女性を見る。

「いや、この検査の中にはすぐに結果が見られるものもあるのですが、それを見る限りあなた相当お疲れのようだから」

女性は心配そうな顔でそう付け加える。

「声が」

男は自分が答えたことに驚く。頭の中の声のこと、眼を

穿つような景色のこと、それは誰にも言ったことがなかったからだ。

「ただど今日はどうしても言ってしまうような、全て吐き出してしまいたいような衝動に駆られる。」

「お悩み事あれば何でもおっしゃってください。私はそういう内容も専門ですのよ」

彼女の声はやたら優しく響く。それに誘われるように男の口からはぼつぼつと言葉がこぼれだした。

「あの、頭の中で、声が。声が、聞こえるんです」

「声、と言いますとあなたの声ですか？ それとも誰か他の人の声？」

「私の声です。でも話している内容は私が思っていることじゃない。誰かが私の声を使ってるんです」

「なるほど」

女性は考え込むようにした後、後ろにいた男性職員に何か小声で指示を出した。

「続けてください。それがお仕事中にどう影響してきますか？」

真剣な目でこちらを見る。

「ええと、その、頭の中の声がうるさくて、現実の音が聞こえないときが多くて。工場で、あ、私は封筒の口を折る工場で働いているんですが、その工場長はかんじが悪くて、いや、あ違うんです、そこで働いていて」

「落ち着いて。ゆっくりでいいですよ」
「ええ、その工場で指示とかが出されるんですが、頭の中の声が邪魔で上手く聞き取れないんです」

「その声のせいで現実世界にはもやがかかったように感じるということですか？」

「そうなんです！ まさにその通りだ！」

女性的的確な表現に思わず男は興奮して立ち上がった。

「あつ、すみません。でもとにかくあなたの言う通りなんです」

「あなたはその靄を消してしまいたいのですか？」

「えっ」

男はずっと声によってかかる靄に悩まされていたが、不思議とそれを消したいかどうかと問われた時の答えは用意されていなかった。ただ邪魔だと思っていたが、不思議と消したいとは思っていなかったのだ。

「ええと、それは完全に消してしまおうということですか？」

「はい、この薬を飲めばその症状は完全に治まります」
そういうと職員が持ってきたカプセルのシートを男に見せる。レモン色のような淡い色をしている。

「……」

男は即答することができなかった。

「この薬さえ飲めばあなたを苦しめている声は聞こえなくなり、靄は消え、仕事で単純なミスを繰り返すこともなくなるんですよ」

女性は力強くそう語りかける。男は答えられない。

「では一週間だけ試しに飲んでみてそれから決めるというのはどうでしょう？」

痺れを切らしたように提案してくる。しばらく悩んだ後男はそれなら、と薬を受け取った。

*

検査時間自体はわずか数十分だったのに、最後のやりとりのせいで男はどっと疲れていた。なぜ男が薬をすぐを受け取らなかったのか、あんなに悩まされている声を、靄を消せるのに。それは男自身もよく分からなかった。

意を決して薬を飲んでみることに決意した男は、台所

に行きグラスに水を汲む。一日一回だけ朝に飲むようにと飲まれていたが効果が気になるので帰ってきてすぐに飲んでしまった。

するとどうだろう、なんだか目がぼつちりと開いて、背筋が伸びるような感覚がする。夜になってもどうも眠りたくないし、何か動き回っていたいと彼は思った。普段絶対思わないようなことだ。

散らかっている下手を勢いよく片づけ始める。皿を機械に入れ、床に乱雑に並べられた洋服を拾い上げ、バラバラの場所に置かれた本や書類を一か所に集める。その後彼はネズミのようにちよこまかと動き回り、清潔な巣を作り上げた。

夜が明け、工場へ向かう時間になっても彼の眼は冴え切っていた。作業着をきちんと畳み、バッグの中へ。余裕を持って家を出ると、いつもと同じ時間に、いつもと同じ道を通って工場へ向かう。理由は分からないがそれが苦痛ではなく、むしろ喜びすら感じていた。工場での作業も難なくこなし、工場長の呼びかけにもはきはきと応じる。その返事に相手は思わず面食らった顔をしていった。

彼は次の日の朝も、その次の日の朝、その次の日の朝もカプセルを飲んだ。そうすれば全てが上手くいくからだ。仕事でなんのミスもしないし、規則正しい生活を粛々と送ることができる。

薬を飲み始めた一週間後、男はある事実気づく。一週間一度も絵を描いていないのだ。彼は物心ついた時から絵を描く事だけは欠かさなかった。それなのに一週間も絵のことを思い出しすらしなかった。それは男にとつてとてつもなく大きなものを失ったような感覚だった。すると、またあの声だ。

絵なんか描かなくなったっていいじゃないか。お前は適切な生活を送れているんだから。そもそもお前の絵なんて最初から誰も興味ないものだったんだよ。

「うるさいうるさいうるさいうるさい！」

男の怒声に反応して工場のブザーが響き渡る。他のライオンの作業員が何事かという顔で彼の方を見て、慌てた様子の工場長が事務室を飛び出してくる。彼は途端に工場の外へと駆けだした。

「はーっはーっはーっ」
息を荒げながら自宅へと走る。追いかけてくる工場長など無視だ。

駆け込むように自室に入ると、彼は迷わず絵筆を手に取りキャンパスの前に立った。

なぜだ。何も描けない。

何も描きたいものが、描けるものが、描くべきものがない。思いつかない。何一つとして思いつかない。

男の頭はその考えでいっぱいになった。乱暴にカーテンを開き、外の景色を見る。男は絶句した。なんてつまらない景色なんだ。突き刺すような色彩も悪夢を見せるような異形も何もない。なんなんだこの世界は。

ドンドンドン

どうやら工場長が追い付いたようだ。扉を激しくたたき音は、もはやただの音で、頭の中で反響して彼を苦しめることもなかった。彼の頭の中は驚くほど静まり返っていて、彼の見る世界は驚くほど穏やかだった。その時彼は何が自分に絵を描かせていたのかを初めて

知った。そして自分が何をしたのかも。

ドンドンドン

扉を叩く音がどんどん遠ざかっているように感じる。そんなはずはないのに。ああ、ああ。静かすぎる。穏やかすぎる。なんだこの場所は。もといた世界に戻してくれ。

あの声が、霧が。あれがないと私は何も描けない

ドアが勢いよく開き、工場長は男が青い作業着の上で倒れているのを見つけた。テーブルの上にパレットナイフは、置かれていない。

彼のいる世界は驚くほど平凡で退屈だった。

彼のいた世界は驚くほど平凡で退屈だった。

彼のいない世界も驚くほど平凡で退屈だった。